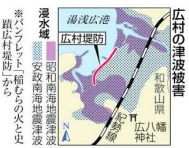


備える 3.11から 災前の策

第130回 歴史に学ぶ①「稲むらの火」



「稲むらの火」は、安政の大津波で被災した家々を救った津波の神様と伝わる。その家業を失った住民に仕事を付けたため、広村で一番の名士だった橋本が私財を投じて、地蔵の翌年から四年をかけて建設した。

「私たちが住民は親しみ込み、橋本さんの堤防と呼んで、いまは全長六百五十メートルの指定史跡「広村堤防」が、安政の大津波で壊滅した家々を救った津波の神様と伝わる。その家業を失った住民に仕事を付けたため、広村で一番の名士だった橋本が私財を投じて、地蔵の翌年から四年をかけて建設した。

夜の避難路照らす英断

昨年米、米ニューヨークでの国連総会で、11月5日が「世界津波の日」に制定された。1854（安政元）年のこの日に発生した安政南海地震の大津波から故郷の人々を守った、ある日本人男性の逸話がきっかけだった。ギリシャ生まれの作家小泉八雲の英文小説「ア・リビング・ゴッド（生ける神）」によって世界にも知らしめられた彼の名は、浜口梧陵（1820-85年）。その舞台となった和歌山県広川町（旧広村）を訪ねた。（谷悠己）

浜口梧陵が守った港町



「稲むらの火」の館 浜口家から寄贈された私邸を再活用し、2007年に開設。橋本の生い立ちや功績を展示する「浜口梧陵記念館」と、3D映像や大型水筒など科学的津波を学べる「津波防災教育センター」からなる。JR紀勢線の湯浅駅から徒歩15分。入館料は一般500円、高校生0円、小学生100円。月、火曜は休館。語り部グループによる広村堤防の案内も無料で受け付ける。電話0737-641760

戦前から教科書や教材に

「稲むらの火」の逸話は小説や絵本だけでなく、小学校の教科書にも採用されている。安政の大津波から約40年後の1896（明治29）年、小泉八雲が逸話を題材に「ア・リビング・ゴッド」を出版。これを師範学校時代に読んで感銘を受けた地

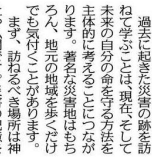


「稲むらの火」の逸話を載った旧文部省の国語教科書と絵本

元出身の教員中井常蔵が旧文部省の教材公募に応募し、1937（昭和12）年に小学5年の国語の教科書に採用された。中井は橋本が創設した私塾「耐久社」の流れをくむ耐久中学校の出身で、橋本が築いた広村堤防の上を歩いて登校したという。稲むらの火の物語が載った教科書は10年間しか使われなかったが、東日本大震災後の2011年4月、関西大の河田恵昭教授（防災・減災論）の文章の題材として64年ぶりに復活。現在も全国の6割の小学校で使われている。

「稲むらの火」の逸話を載った旧文部省の国語教科書と絵本

「稲むらの火」の逸話を載った旧文部省の国語教科書と絵本



過去に起きた災害の跡を訪ねて学ぶことは、現在や未来の自分の命を守る方法に主体的に考えることにつながります。著名な災害地にももちろん、地元の地蔵歩きや付帯活動があります。訪ねるべき場所は神社や公園です。災害の記憶を

「温故知新」は防災のヒント

名古屋大減災連携研究センター長 福和仲夫教授

い。実際に地形を変えた上で、国産の電子資料「ナ」で昔の地図や市町村史を調べると、災害の後にどんな町づくりが進んだのかが分かります。地名も地形の変化を知る手がかりになります。例えば海沿いの地域で「堤」が付く地名は堤田の名残だったり、干拓地跡には新田発をした人の名前が付いていることがあります。歴史学に学んだことが現在の防災対策に生かすには、居住地のハザードマップを見たり、自治体の防災援助制度を調べたりする方法もあります。名古屋大の減災館（名古屋市中区不老町）にも歴史地震の跡地を訪ね歩くための地図や資料がそろっていますので、ぜひ利用してください。

「稲むらの火」は、毎月第一日曜日に掲載予定。次回が九月五日です。